The 14th

ヘップバーンに恋して

「苦しいのは　君だけじゃない」

理・美容室には、様々なお客様がみえる。悩みや苦しみ、悲しみや淋しさを抱えて。

この話も、そのなかのヤングケアラーのお客様に贈ったお話である。

思い起こすのも、ためらうほどあの頃の自分が嫌いになる。どうしてあんなことを、したんだろう、、どうしてあんなことを言ってしまったんだろう。

父と母と姉と弟と五人暮らしの我が家は、お世辞にも豊かではなかったが、日々楽しく暮らしていた。

自分が中学一年生になる時の3月の初めの頃の朝、便所から父の声がした。何を言っているのかわからないが、急いで駆けつけると、お尻を出したまま、ひっくり返っている姿があった。母を呼び、姉を呼び、三人で取り合えず布団まで引きずり寝かせた。往診してくれるお医者様に連絡して、来ていただいた結果、脳梗塞という診断だった。

それからの我が家は、半身不随になった父の介護が、生活の中心になった。動かない半身に、苛立つ父の暴言、必死に支え耐えている母親。少しでも役に立とうと姉と私は洗濯や、濡れてしまったお布団を朝、干していくのが日課となった。姉は進学をしないで東京へと就職していった。わずかな仕送りをしてくれていた。姉も厳しい生活をしているだろうと思うと、不甲斐ない自分に腹が立った。ひとり小学生の弟だけが、急変した日々に、虚ろな目をしていたことは、忘れられない。悲しくて苦しくて、学校の校舎の壁を蹴り、壊して大問題になった。それから教師の目線が自分を見なくなった。無視されるってこういう事なんだと知った。中学一年生からアルバイトに励んだ、家の生活費、自分の中学校でかかる費用を捻出した。あらゆるアルバイトをした。お腹がすいて帰り道、人の畑のトマトにかぶりついた時もあった。

人生がこんなにも過酷だと知ったのは、中学三年生の5月だった。母が死んだ。

あんなにも優しかった母、いつも歌を唄っていた母がいなくなった。母に好かれるよう勉強に励んでいた自分。小学校から中学校までずっとクラス委員長になったと報告するとすごく喜んでくれた母。がいない。夜、真っ暗な裏山に入って、泣いた、おいおい泣いた。弟に聞かれないように泣いた。

それから父と弟と三人の生活が始まった。朝、父の布おむつを取替え、手洗いして干す。ご飯を食べさせて、弟のご飯も用意して、学校に行くとすでに二時限目が始まっていた。お昼の給食を終えると調理室に向かった。残ったパンと牛乳を貰う。手渡ししてくれるオバちゃんがすごく優しかった。無言で下校して父にパンを食べてもらう。そんな日々が3カ月経った頃、父がなぜか腹を立てて自分を怒鳴る、どうしていいか分からない、死んでしまいたい、そんな思いが頭の中をぐるぐる回る。「父ちゃんなんか死んじまえ！」言ってはいけない言葉を言ってしまった。びっくりする父。怯える弟。離れて暮らす異母兄弟の兄が帰って来てくれたのがその秋。兄が帰って来てくれなければ、どうなっていただろう。仕事を辞めて帰って来てくれた兄には、感謝というか言葉にならない。

もっと早くSOSを誰かに言えたなら、そういう社会であったならと今だから思える。介護生活の中、朝の玄関前に、置いてあった野菜、お米、服、近所の方が見かねてくれたのだろう。それはそれは光のような事だった。それでも精神的に経済的に限界だった瞬間、人は最悪のことを考える。

今、自分は地域社会の経済的に恵まれない子供たちを照らす事を行っている。一人でも、笑顔を生み出せたら幸いだ。SOSに気が付いてやれる大人でいたい。

（文　五番街代表　大倉太喜生）

▲ 真実の口

▲ 産休中のスタッフと

hair design 五番街
TEL.0287-36-6811
那須塩原市太夫塚
6-232-213